

# 日英交通史料(九)

## Bibliography of Anglo-Japanese Relations (IX)

武藤長藏

(239)

文化英船渡來ニ付蘭人口書

と表記する文化五年英艦フエートン號(H. M. S. "Phaeton" at Nagasaki in 1808)の事件に關する一冊の寫本を私は昨昭和六年上京中佐賀鍋島侯爵家歴史編纂に従事されて居る早稻田中學校長文學士中野禮四郎氏より他の此の英艦フエートン號事件の寫本と共に借受けた。私は其複寫を日英交通史料(九)のはじめに(239)として茲に掲げたい。

即ち私が前號に日英交通史料(八)中に掲げた(235)佐賀鍋島侯爵家所藏をくれす船渡來記(236)鍋島家所藏文化エゲレス船入津の一通並蒲原書狀(237)長崎縣立長崎圖書館保管寄託諫早男爵家所藏諫早文庫中の英艦フエートン號事件史料に續く史料である。

(前號に諫早家史料を(236)としたのは(237)の誤である。(237)故、サトウ氏藏書中の史料は(238)を改む)

この鍋島侯爵家所藏本「文化英艦に付蘭人口書」なる寫本は複寫本で幕末に寫されたも

のらしいと中野禮四郎氏は私に語られた。また目附大小通詞の姓名は中野氏が記入されたものである。この寫本には其扉に次の如く書いてある。

「文化五年辰八月十五日エケレス船渡來ノ節旗合阿蘭陀人兩人人質ニ召捕候ニ付御調子カヒタン其外ヨリ差出候口書並御吟味ノ寫」

扉の文句は以上にて終り次に紙を改めて其本文は次の如く書いてある。

(昭和七年六月長崎に於て武藤長藏しるす)

(通航一覽第六、卷二百五十八第四百二十九頁には昨十五日と記す)

昨日御當地高銚島(蘭人の所謂 *Tapanbata*) 前エ碇ヲ入候エケレス船主ヨリ筆者阿蘭陀人ホフセマンヘ申聞(通航一覽にはと申上記す) 候趣左ニ奉申上候

一エケレス本國出帆仕辨柄國(蘭語 *Bengalen* 英語 *Bengal*)ヘ乗渡同所ヨリ四十九日經テ御當地ヘ着岸仕候尤本國出帆仕候儀ハ八ヶ月程ニ相成申候

一本船人數三百五十人乗組居申候(通航一覽第六、四百二十九頁には二百五十人と記すれど誤也)

一今般御當地エ渡來仕候儀ハ連々申上候通エケレス國ノ儀ハ阿蘭陀國ト不和ノ國故御當地迄慕ヒ妨仕候心組ニテ乗渡候儀ニ御座候隨テハ旗合ノ節筆者阿蘭陀人兩人謀計ヲ以テ召捕候儀ハ通辦等ノタメニテ全ク御國奉對聊不敬等仕候所存ニ無御座候然ル處數日ノ洋中ニテ薪水ノ料乏敷相成候ニ付不和ノ國ニハ御座候得共難儀ノ餘リ阿蘭陀人ヘ書翰相認サセ差送り申候處右薪水食物早速被遣難有奉存候然ル上ハ阿蘭陀人兩人差返直ニ御

當地出帆仕再ヒ御當國エ近寄申間敷候此 乍恐御禮奉申上候  
右ハエケレス船主申口筆者阿蘭陀人ホウセマン承之候越申上候

カビタン

ヘンテレキドウフ

右ノ趣カビタン横文字書付ヲ以テ申上候ニ付和解仕差上申候以上

辰八月十六日

目付大小通詞

茂 傳之進

加 福 喜 藏

石 橋 助左衛門

中 山 作 三 郎

名 村 多 吉 郎

今 村 金 兵 衛

横 山 勝 之 丞

今 村 才 右 衛 門

(附註)

茂傳之進以下今村才右衛門の姓名は中野禮四郎氏が書添へられたものである。通航一覽第六、卷二百五十八第  
四百三十頁にもたゞ大通詞、小通詞と記するのみで姓名を一々列記して居らぬ。

エケレス船ノ儀ニ付カヒタン存念ノ趣申上候横文字和解

一連々奉申上候(通)エケレス國ノ儀ハ敵國ニ御座候處此節御當地迄モ慕ヒ妨仕候心組ニテ罷越候段カビタンニ於テモ歎ケ敷可存然ハ向後ノ儀ヲモ被思召上被船出帆御差留嚴敷被仰付方モ可有御座候ニ付私存念ノ趣申上候様被仰付誠ニ御厚儀ノ次第重疊難有仕合奉存候隨テ右ノ段私ヨリ御願ヲモ可申上儀ニ御座候ヘトモ今般御當地エ罷越候儀ハ彌私共ヲ爲妨ニ慕ヒ罷越候哉敵國ノ者申聞候故耽ト難申上(御座)候乍然薪水之料船主申上候趣私ヨリモ御願申上候通品々被下置候故奉感御恩儀ヲ御蔭ニテ召揃候者モ差送り相返シ船主モ本船ヨリ下リ立厚御禮申上早々御當地出帆仕再渡モ仕間敷段申之候然ルニ嚴重被仰付候節ハ格別御手當等被仰候儀ニモ可有御座候得共萬々一船等損シナカラモ歸帆仕候様御座候時ハ却テ諸事ノ害ト相成可申奉存候ヘバ被者共申立候通早々歸帆被仰付被下度奉願候

カヒタン

ヘンデレキドウフ

右ノ趣カヒタン横文字書付ヲ以テ申上候ニ付和解仕差上申候以上

目付大小

辰八月

通詞

(名前同上)

今日御奉行所へ私儀被召出於御前御尋ノ趣左ニ御答申上候

一此度異國船渡來ノ節紅毛ノ旗ヲ立欺キ筆者阿蘭陀人兩人本船へ引上ケ候次第最初ハ咬啗吧仕立ノ船ト申立後ニハエケレス國ノ由申立候儀全クエケレス國ノ船ト存候哉右ハ商賣船又ハ賊船カ軍船ト申事ニ候哉

阿蘭陀旗ヲ立咬啗吧（\*咬啗吧はカラツパー又はカルバと我國にて呼ばれ語源は椰子 Kelapa (Malay 語也 Coconut 意の) Klappa Kalappa より出づ。カルバはジャバ島の一邑なりしが後ジャカトラ Jacutra となり。長崎自治史マレー語辭書等參照）仕出ノ船ト最初申立候ハ全ク欺キ候儀ニテエケレス軍船ニ相違無之様ニ奉察候

一右ハ彼國ノ大船ニ候哉小船ニ候哉端船三艘湊内ニ乗廻リ擢ヲ遣ヒ進退自由被國ヲロシヤ船杯モ都テ右體ノ儀ニ候哉

右船長サ凡三十間モ有之阿蘭陀語ニテ「フレカツトシキツプ」(Fregatschip) ト相唱申候軍船ト見請申候尤軍船ノ大成モノ阿蘭陀語ニテ「リイニイシキツプ」(Linietschip : line of battleship, man) ト相唱ヘ長サ三十六

七間程有之石火矢六十挺ヲ以上三段ニ備申候且又端船ニ擢ヲ用ヒテ進退自由ニ仕候儀ハヲロシヤ其外歐羅巴州何レニテモ同様ニ御座候

一船形人物ノ様子ニテモ彌エケレス船ト存候哉

船形ニテハ難見究候ヘトモ人物ハエケレス人ニテ其上石火矢ニエケレス國王ノ名記有之候ヲ筆者阿蘭陀人共見請候由承申候

一紅毛船日本渡海ノ節エケレス船ヨリ妨ニ逢荷物等被奪候儀モ及承候哉

御國エ渡海ノ節エケレス船ニ妨ラレ候儀ハ是迄及承不申候尤本國ヨリ咬啗吧ヘノ往來ニハ被奪取候儀モ有之阿蘭陀ヨリモエケレス船ヲ奪取候儀ハ折々有之候

一異國船水薪等之數願候連紅毛人又ハ日本人等人質ニ取候儀モ無之穩ニ願候テ差遣來候此度ノ船日本人エ言語通シ兼候トハ乍申紅毛人兩人本船ヘ引揚候儀ハ通辨ノ爲計ニハ無之何ソ子細有之候トハ不察候哉

通辨ノ爲ニ船主申立候儀ハ疑數薪水ノ料ヲ乞候爲ニモ可有之哉是以不審ニ奉存候

一右船是迄日本ノ地方近ク通船候儀及見聞候儀ハ無之哉

是迄及見不申候尤曆數千六百七十三年<sup>日本延寶元</sup><sub>丑年ニ當ル</sub>御國御常津ヘ渡來仕候儀ハ承リ及申候

一右船三百五十人乗組ノ由右ノ通ニテ商賣荷物等積込有之儀トハ不察候哉

乗組人數ハ三百五十人ト承知仕候且荷物ノ儀ハ軍用ノ外商賣荷物等積込有之候儀トハ不察候哉

一阿蘭陀國ヘハエケレス國連々敵國ノ趣ニ付實々當地迄妨ノタメ慕來候儀ハ實事ニ存哉外ニ子細有之事トハ不心付候哉

阿蘭陀船妨ノ爲渡來仕候旨船主申立候儀ハ虛實差究難申上外ニ子細モ有之事哉ニ奉察候

一右船中ニテ筆者阿蘭陀人何ソ難心得儀等ハ無之哉出島ヘ歸館ノ上承候次第可申聞

兩人ノ者滯船中ニ沖番所ノ外御要害ノ場所有之石火矢其外武器等嚴重ニ相備有之哉其外湊内ノ事船主ヨ

リ相尋候ニ付右場所ヘハ罷越候儀無之故存知不申段筆者阿蘭陀人ヨリ答候由出島ヘ歸館ノ上申聞候外承

リ候儀モ無御座候

右ノ條々其方共如何相心得候哉存寄ノ趣可申聞尋ノケ條外ニモ乍察モ心附候儀ハ委細可申聞事且心附候儀ニテハ不容易事ト心得申立兼候儀モ候ハ別段横文字ヲ以可申聞候事

心附候儀モ御座候間別段可奉申上候

カヒタン

ヘンデレキドウフ

右ノ趣カヒタン横文字書付ヲ以テ申上候ニ付和解仕差上申候以上

目附大小

辰八月廿七日

通詞

今日御奉行所へ被召出於御前カヒタンヲ以テ御尋ノ趣左ニ御答申上候

一八月十五日異國船渡來ノ節、旗合トシテ其方共兩人罷出候節ノ始末並本船へ被引揚候節ノ様子可申聞

晝九ツ時頃例ノ通旗合トシテ私共兩人沖エ罷越小瀬戸（通航一覽には小瀬戸をば按ずるに肥前松浦郡に屬す、長崎の近傍なりと註す松浦郡に屬すとせしはこれ誤也）

（通航一覽第六、卷二百六十第四百四十八頁參照）ニテ沖ノ様子見分仕候上御檢使船一同白帆船近ク漕寄候處阿蘭陀人ノ旗印刷ニ

相見御檢使ヨリモ御尋ニ付阿蘭陀旗ニ相違無之段申上白帆船近ク漕寄聲ヲ掛ケ相尋候處阿蘭陀ト本船ヨ

リ阿蘭陀語ニテ相答候ニ付此段モ御檢使エ申上候内本船ヨリ端船ヲ卸シ私共乗組ノ船漕付ケ候ニ付猶又

相尋候處阿蘭陀船ニテ咬啗吧仕出ノ旨相答其末此端船ニ乗移リ本船ニ乘リ候様端船ノ者申聞候ヘトモ其

儀ハ不相成無程御檢使一同可罷越旨相答候内本船ヨリ何カ高聲ニテ申候處直ニ端船ノ者共劔ヲ拔キ數人

立掛リ理不盡ニ私ヲ捕端船ニテ本船連行申候

一本船ニテハ何様ノ次第ニ有之候哉

船主私共ヲ捕鐵砲ヲ胸ニ押當阿蘭陀二艘來津ノ様子有體ニ申候様申聞候間入津無之段相答候其末

（通航一覽

には其節）ハ穩ニ會釋<sup>アシラ</sup>ヒ申候と記す

一 最初咬啗吧 (武藤曰く Jacatra を指す Jakatra と綴る Thomas Stamford Raffles の瓜哇史 (The History of Java) (W. Frun Mees 著 瓜哇史 (Geschiedenis Van Java) 第二卷 (Deel II) 舊ヤガトラ略圖 (Scheets Van Oud-Jacatra) 松岡靜雄氏譯書等參照) 仕出シト申候由ニ候得共言語人體等エケレス國ニ無相違存候哉

咬啗吧 (武藤曰く Jacatra 今の Batavia を指す) 仕出ニテハ無之言語人體等エケレスニ相違無之樣見請申候  
一 船ノ大サ何程ニ候哉

凡三十間程有之候

一 石火矢何挺程仕掛ケ有之候哉二段ニ候哉船仕掛ケ外ニモ石火矢大筒等有之乗組ノ者銘々小筒持居候哉

石火矢ハ上下二段ニ仕掛ケ下段ノ左右ニ三十二挺上段ハ舳先ノ左右ニ四挺艦ノ方左右ニ十二挺都合四十  
八挺相備其外大筒鐵砲大小並種々玉等ハ見候へ共外ニ相替候武器等ハ及見不申候扱又乗組ノ者共銘々  
小筒等持居候儀ハ本船ニ罷在候時ハ見掛ケ不申候スコロトサツカ (Schroot zakken) 獸皮或ハ帆布綿ノ如  
キ粗布ヲ以テ袋ヲ造リ其中ニ彈丸或ハ切彈古キ釘等數多火藥ト共ニ堅ク究テ外面ヲ苧繩ニテ纏イタル上ヲ  
チヤン塗タル火器ヲ「スコロトサツカ」(武藤曰く Schroot zak, tangrel bag の意)ト唱申候

一 旗ハ何國ノ旗ニ候哉

十五日私共本船へ連行候迄ハ阿蘭陀旗ヲ建其末十六日ニハエケレス國王旗ヲ穩ニ建舳先ニモ同國ノ小旗  
建申候

一 乗組人數何人程ニ見請候哉乗組ノ内ヲロシヤ人ハ乗組居候哉エケレス國ノ者斗ニテ外國ノ者モ入交リ本國者  
ハ居不申候哉



人數ハ三百五十人ト承リ申候右ノ内エヲロシヤ人等見掛ケ不申候尤阿蘭陀ハ一人乗組罷在其他ハ都テエケレス人ト見請申候乍然水夫共ハ中段ニ住居仕共儀ハ船主部屋エ差置候故差究難申上候

一船ノ造リハ何様ノ船ニ候哉本船ニ居候内船ノ内及見候様子可申立候

船ノ造ハ歐羅巴州ノ軍船ト同様ニ有之候私共船主部屋へ罷在候事故船ノ内ハ存不申候

一鐵砲ノ外武器ハ何々見掛ケ候哉乗組ノ者共一同劔ハ附居候哉

第五ノ御ケ條ニ御答申上候外ニ相替候武器ハ見掛ケ不申候扱又乗組ノ者共船ノ内ニテハ帶劔ハ不致候得共端船乗候節ハ帶劔仕候

一其方共取戻シノ爲メ檢使船本船エ附候節端船ニテ右檢使船ヲ取卷被是ト手間取候内檢使船永ク掛リ居候テハ宜敷カル間舖早々引離候様ホウセマンヨリ申候由右ハ何様ノ様子ニテ右ノ通申候哉

其夜御檢使船本船エ被漕寄候處船主下知イタシ端船砲器相備ホウセマンニ役掛ノ者其外水夫共數人附添御檢使船ノ際ニ參リ御檢使御沙汰ノ趣承リ本船エ立歸船主へ申聞候處何レ明朝御出被成候様船主申聞横文字差出候ニ付其旨御檢使エ御答申上候處御檢使ヨリハ今晚御乗船被成旨御沙汰有之候處船主憤リ候顔色ニテ御乗船被成候様ニト相答申候然ル處又々通詞衆ヨリ御檢使御乗船被成候テモ彌不敬等ハ無之候哉ト被相尋候ニ付船主ヨリハ其通リ申出候得共船主其憤リ難心得様子見請候ニ付怪敷返答仕自然御檢使御乗船被成候テ萬一狼藉有之儀モ難計速ニ御船ヲ被離候方可然奉存候故早々本船ヲ被漕離候様申シ候處船主ヨリモ日本船ハ本船ヲ離候様ニト頻ニ申聞候扱又御檢使船ヲ端船ニテ取卷言譯ハ何故ト申儀承知不仕候

一御國エ對シ聊不敬等仕候所存ニ無之旨申出候由右ハ船主其方共へモ右ノ通申候哉

右ノ通船主ヨリ私共ヘ申聞候儀ニ御座候

一端船ニテ湊内乘廻リ紅毛船入津ノ有無相尋候由右端船卸湊内エ出シ候儀ハ船主ヨリノ差圖ニ候哉船主モ湊内エ乗入候哉

端船數艘ニ砲器等相備湊内ニ乗入阿蘭陀船ノ有無相尋候儀ハ船主下知イタシ自身モ乗組罷在候由申シ候其節私共儀ハ船主部屋ヘ差置候故及見不申候

一端船ニ五十人程宛乗組大筒等モ備候由何様ノ様子ニ候哉

右ノ通於本船承リ候儀ニテ及見ハ不仕候

一エケレス船乗組ノ内其方共是迄出合候者ハ乗組不申哉

是迄出合候者見掛ケ不申候

一本船ヨリ卸シ候節水薪其外送物ノ挨拶エケレス人ヨリ厚ク申候由何様申候哉

御奉行様エ御禮申上猶又カヒタンヘモ厚ク挨拶イタシ吳候様船主申聞候既ニ通詞衆エモ挨拶イタシ候様子ニ見請申候

一右尋ノ外ニモ如何ト心付候儀ハ可申立候

カヒタンエ申達候外私共心付候儀ハ無御座候

筆者頭

テルクホウセマン

筆者

\*ケルリツトシキンムル(\*G. Schimmel)

右ノ通兩人ノ者共申之候ニ付書付ヲ以テ奉申上候

\*カヒタン（\*カヒタン甲比丹は葡萄牙語 Capitão 也）  
（り来る。鎖國時代蘭館長をかく呼べり）

ヘンテレキトウフ

（附註）通航一覽第六、卷二百六十第四百五十頁に記する如く通航一覽には左の如き文句を附記す。

右の趣カヒタン横文字を以申上候ニ付和解仕差上申候 以上

辰九月

茂 傳 之 進

石 橋 助 左 衛 門

中 山 作 三 郎

名 村 多 吉 郎

此度エケレス船渡來出帆迄ノ始末ハ追々被爲聞召候通ノ次第ニ付委細申上候ニハ及間敷右船乗渡候趣意  
相考候趣乍恐左ニ奉申上候

一エケレスノ儀ハ阿蘭陀ト敵國故今度阿蘭陀船ヲ妨イタシ候爲御當所エ迄渡來候儀ハ年來怨敵ノ事故左モ可有  
御座乍然エケレス船ハ前々ヨリ印度邊迄渡來イタシ候事故是迄ニモ斯謀リ可申哉且御當國渡來ノ洋中ニテモ  
エケレス軍船ヲ以テ阿蘭陀商船ヲ奪取候儀モ是迄ハ承及不申候其上御當地エ繋居候阿蘭陀船ヲ奪取候ハ、究  
テ御救ノ勢御差加可被下段ハ相辨ヘ可罷在將又日本ヘ敵對イタシ候所存無之段船主申之候得共是以信用難  
仕其故ハ端船ニテ湊内漕廻リ阿蘭陀御當津ヘ繋リ船無之儀ヲ及見分折節風順ニモ有之速ニ歸帆可仕筈ノ處無  
其儀水食用ノ品々ヲ乞ヒ翌日ハ亦々端船ニテ御番所邊モ漕廻リ其外沖手所々見分仕り色々圖等モ書留候由剩  
水野菜等手ニ不入時ハ日本船唐船共燒拂可申坏ト申候趣ハ日本エ敵對不致トノ申候トハ兩端符合不仕素ヨリ

敵國ノ者ノ申口虚實何分難相分候故船主申口不相拘何故ニエケレス船御當所へ渡來イタシ候哉ト得ト相考候處去年來御當國北地ニヲロシヤ人乗渡及亂妨候譯モ有之候ニ付ヲロシヤ船御當地エ乗渡候ハ、究テ可被爲害候依之ヲロシヤエケレスノ兩國兼テ好身ヲ結ヒ罷在候任セ幸ヒエケレスヨリ毎年商賣トシテ唐國廣東へ阿蘭陀八九月ノ頃日本六七月頃乗渡候右商賣船往返ノ洋中敵國ヨリノ妨ヲ相防候爲軍船四五艘差添一同乗渡リ商賣中右軍船空敷廣東エ滯船仕候依之御當所御要害何様ノ様子ニ有之哉爲見分右軍船ノ内一艘御當地エ乗渡リ尤右ノ趣意ヲ隱シ阿蘭陀船ヲ妨候爲渡來仕候趣僞リ乗渡リ候時ハ格別害モ有之間敷相心得今度渡來仕候儀ニハ無之哉右ノ譯ニテ乗渡候儀ニ御座候ハ此節被船主見分仕候一體ノ様子等委敷エケレス國王エ上達仕其旨ヲロシヤ國王エ通シ此度被兩國示シ合御當地エ押寄候様ノ儀御座有間敷哉將又今一應存附候ハ去年來於蝦夷ヲロシヤ人差出候フランス語ノ書面ニ付私儀存付候趣ヲモ其節申上候右書面ノ内

日本ノ人永ク癖ナル所ヨリ自ラ國ヲ失フ事アルヘシ

右様ノ趣意ニ依リヲロシヤ人エケレス船ヲ以テ御當所ノ様子窺ヒ其後押寄可申ト相謀リ此節乗渡候儀ニハ御座有間敷哉是等ノ儀ハ勿論御鑑察モ可被爲在御儀ト奉存候へ共私儀存附候儀モ御座候ハ、可申上旨去年來被仰渡候ニ付テハ恐多クモ前段ノ趣奉達御内聽候

カヒタン

\* ヲムテレキトウフ (\* Hendrik Doeff 出島開館長 Oppe-  
het Eiland Decima 也日本にてはカヒタン甲)  
比丹と鎖國時代に呼ベリこれ蘭語 Capita 也)  
(hoofa der Nederlandes in Japan of

前件エケレス船渡來仕候趣意私トモニ於テ何分不審奉存候ニ付追々カヒタンエ申聞存寄ヲモ承リ候處則前件

ノ趣申出候右ハ不容易次第ニ付何レ横文字ヲ以テ申出候様申聞候處右様ノ儀カヒタンヨリ奉申上候儀甚斟酌奉存候旨申之候ヘトモ口述ノミニテハ難申上段申聞候處存候ハ、極御内密可申上旨申シ差出候横文字意和解仕差上申候 以上

目附大小

通 詞

八月十六日晝頃エケレス船主ヨリホウセマンヲ使トシテカヒタンヘ水薪食物ノ類ノ儀申越候節ホウセマンニ密々爲持遣シ申候

一昨日ホウセマンキンムル端船本船エ連越候譯ハ洋中食物相切レ候ニ付今日右品々御頼ノ爲斯レヒ申候依之ホウセマン上陸爲致候間食物類何卒今日中本船エ御差越可被下候左候ハ、今一人殘シ置候シキンムル差返直ニ出帆可仕候若今日中御差送り於無之ハ明朝迄ニ日本船唐船等燒拂可申候  
右ノ通和解仕差上申候

阿蘭陀

辰八月十六日

年番通詞

(附註) これより以下カヒタン、ヘンデレキドウフ (Hendrik Doeff) 横文字書付和解は通航一覽第六册第四百四十七頁所載の文と同一也

一八月十六日夜私共兩人エケレス船ヨリ差返シ候節ハ(船主)如何取扱ヒ候哉、其節ノ始末カヒタンヲ以テ被爲

成御尋奉承知候右ハ其夜(半)野牛其外食物類ホウセマン附添エケレス船エ罷越右品々持越候段船主エ申聞候處水薪ノ儀相尋候ニ付右ハ明朝被差越候旨相答候所(處)左ノ兩人共品々參リ候迄ハ本船エ留置可申旨申シ候故通詞衆ヨリモ右二品ハ明朝迄ニハ無相違可差遣旨堅ク約定有之、將又持越候品々可被受取旨ニテ相渡候處船中要用ノ品々被下置候御恩儀奉感服候様子ニテ御奉行所エ御禮申上猶又カヒタンエモ返禮トシテ何ソ差送り度旨申シ候得共其儀ハ御奉行所ヨリ御赦免無之テハ申請候儀相成カタキ趣申答候處私共ハ酒喰振舞叮嚀ニイタシ候上ニテ私共上陸イタシ候様申聞候既ニ通詞衆エ御禮申上候様子見請申候扱食事相濟私共本船ヨリ下リ候節ハ陸(階)子ノ階迄皆々送出懸ニ別レヲナシ猶又送り物ノ禮謝再應申聞私共船中ニテ相用候様ニトテ酒ニフラスコ並コツフ一ツ外ニヒスコイト 麥粉ニテ製候食物ニテ御座候(武藤曰く蘭語 Biscuit 今日の説ビスケットを指す) 一包差送り申候

筆者

テル・ホフセマン

同

ケルリツトシキンムル

右ノ通兩人ノ者共申出候ニ付以書付奉申上候

カヒタン

ヘンテレキトウフ

右ノ趣カヒタン横文字書付ヲ以テ申下候ニ付和解仕差上申候以上

目附大小

九月

通 詞

御尋ノ櫛々(條々の誤記にあらざる乎)カヒタンエ相尋候處左ノ通相答申候

一此末咬啗吧ヨリ日本エ渡海ノ洋中ニテエケレス船ヨリ妨ラレ候心遣ハ無之哉

阿蘭陀船妨ノ爲御當國迄慕來候旨船主申立候儀ハ甚疑敷エケレス國トノ戰爭ハ往古ヨリノ様ニテ去々年來ノ戰爭ヨリモ烈敷事ハ是迄ニハ數度有之候得共日本海渡ノ洋中ニテ被妨候儀ハ及承不申候殊ニ此節歸帆ノ唐船ヨリ相頼咬啗吧エ書翰ヲ以委細申越候得共御當地着船ノ儀ハ何分難申上候ヘトモ右書翰頭役共ニ相達候ハ、此末無恙日本渡海仕候様ノ計策モ可有之候得共洋中ノ儀ニ於テハ心遣ノ儀モ有之間敷相考申候

一エケレス國敵國ト申儀ハ何故敵對イタシ候國柄ニ候哉

エケレス國ト阿蘭陀國ト敵ノ儀ハ往古ヨリ今ニ至ル穩成儀ハ稀ニテ何故敵對イタシ候哉ノ儀ハ駈ト相辨不申候

一エケレス船辨柄國エ何故ニ罷越候哉(Engelische Schip)

\*  
辨柄國へ罷越候段申立候儀ハ不審ニ御座候乍然辨柄國ノ内ニハエケンス商館モ有之候事故駈トハ難申上候  
(蘭語 Bengal 英語 Bengal 葡語 Bengala 綴(た))

一旗合筆者兩人出迎ノ節紅毛船ト見請候儀ハ先頃ノ節書ニモ有之候小船ヲ卸シ乘來候節エケレス人紅毛人ト見體モ違ヒ可申隨テハ例紅毛船入津ノ節右體小船ヲ卸シ十四五人モ乘組出迎船エ漕寄候儀モ無之事ニ候間右船乘來候ハ、直ニ心付疑敷存通詞並檢使エ其段早速可申立處其儀無之ハ如何心得候哉

先達テ申上候通船形ニテハ見究難相成人物ノ儀モ却テ歐羅巴人ノ衣類等ハ同様ニ有之容貌ニテハ見分相成不申候尤對談等仕候上ハ阿蘭陀人ニテハ無之儀相分候得共其節ハ阿蘭陀語ニテ咬啗吧仕出ノ阿蘭陀船ト相答候事故兩人ノ者共モ心付本船エ被引揚候上ニテエケレス人ト相知申候扱又端船ヲ卸シ出迎船エ漕寄候儀ハ風波強日本船ニテ白帆船エ漕付カタク既ニ白帆船ト行過キ出迎船ハ却テ跡へ後候處白帆船ハ楫ヲ取直シ沖手ノ方へ向跡エ少シ乘戻シ候テ端船ヲ卸シ出迎船エ漕寄右端船ハ全ク迎船ト相心得兩人ヨリ再應何國仕出ノ船ニ候哉ト阿蘭陀語ニテ相尋候處咬啗吧仕出ノ阿蘭陀船ト相答候故去年歸國仕候役人イ、キスハ乘渡候哉ト又々相尋候處乘渡候段申シ端船へ乗移本船へ參リ候様申聞候得共其場ニ至リ少シ心得カタク様子モ有之候故其儀ハ不相成無程御檢使一同可罷越旨相答候内本船ヨリ何カ高聲ニテ申候所直ニ端船ノ者共劔ヲ拔數人立掛リ理不盡ニ兩人ヲ捕エ本船エ連行申候儀ニ御座候得ハ通詞衆ヲ以テ御檢使エ申上候間合無御座候

一何國仕出ノ船ニ候哉ト相尋候ハ如何ノ譯ニ候哉ノ旨被爲成御聞候

此儀例年トハ違ヒ當年ハ旬後レ候ニ付テハ遠見番其外出迎船無之處白帆船見出候御注進有之其上出迎船エ例ノ書翰被差遣候處順風ニテ追々近寄候御注進有之候故右返翰不待請旗合トシテ沖エ漕出シ候處白帆船ハ近寄候得共前段返翰ノ否モ承リ不申候ニ付何國仕出ノ船ニ候哉ト相尋儀ニ御座候



右ノ通カヒタン相答申候ニ付以書付奉申上候以上

辰九月

御尋ノ趣旗合ニ罷越候筆者阿蘭陀人共エ相尋候上左ニ御答奉申上候

一異國船エ乗組居候阿蘭陀人一人先年船頭スノツト、一同渡來イタシ候由何年以前ノ事ニ候哉名ハ何ト申候哉  
年ハ幾ツ位ニ候哉又ハ是迄渡來不致候哉

右エケレス船エ乗組候阿蘭陀人四五ケ年已前船頭ス、ツト (*Smith* なるべし然らばス) ト一同御當地エ乗渡候様ニ通詞衆エ物語仕候由及承候得共船主ス、ツト儀ハ十四ケ年以前ト九ケ年以前ト御當地ニ乗渡候儀ニ御座候名ハメツセラア (*Dinner*) ト承リ候得共耽ト聞留不申年齡ハ凡三十歲位ト見請申候勿論右ノ者ノ儀ハ御當國ニ於テ兩人ノ者トモ是迄及見候儀無御座候

一右ノ阿蘭陀人ヨリ筆者阿蘭陀人共船中ニテ異船ノ様子等承リ候儀ハ無之哉前條船主スツト (*Smith* スミット乎) ト一同渡來イタシ候杯ニハナシ候哉

筆者阿蘭陀人共エケレス船主應對ノ節ハ右ノ阿蘭陀通辨仕候儀モ有之候得共外ニ何ソ承リ候儀無御座候尤四ケ年以前ス、ツトノ船エリサヘツト (武藤曰くこれ *Elizabeth* 乎 *Smith* が我國に來りしは 1795 には *Com-paign* として 1807 に來れり) ト申候阿蘭陀船ニ乗組居候ワイレラフンセ (咬嚼吧トカラフトノ *Nasachus* の *Ylot* とく不明) 中島近邊ニテエケレス船ヨリ被奪取候由物語仕候  
右ノ通筆者阿蘭陀人共申出候ニ付書付ヲ以テ奉申上候

カヒタン

ヘンテレキトウフ

右ノ趣カヒタン横文字以書付申上候ニ付和解仕差上申候以上

目附大小

通詞

異國船エ乗組居候阿蘭陀人ト咄合仕候始末被爲成御尋候ニ付乍恐左ニ御答奉申上候

一八月十六日七ツ時頃水野榮積トシテ私トモ異國船エ乗附候處乗組ノ内一人右異船ヨリ阿蘭陀語ニテ能ク通辨仕候者有之候ニ付何國ノ者ニ候哉ト相尋候處生國阿蘭陀ニテエケレスヨリ被捕ニ相成候由日本エモ渡來イタシ候様物語仕候故何ヶ年以前ニ渡來イタシ候哉ノ儀相尋候處四五ヶ年以前船頭スノツトノ船ヨリ乗渡候由相答候ニ付四五ヶ年以前ニハ乗渡不申旨申聞候處右答モ不仕引取申候儀ニ御座候此段乍恐以書付奉申上候以上

九月

出役通詞

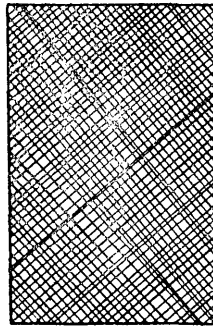
御尋ノ趣カヒタン並異國船へ被引揚候兩人ノ阿蘭陀人共相尋候處左ノ通申出候

一先達テ異國船渡來ノ節船縁ニ帆布綿ニテ矢請ノ如キモノ有之由右ハ何様ノ仕方ニ有之哉

歐羅巴州ノ船ノ縁ニハ都テ鉄ニテ手スリノ如キ物有之夫々圖ノ如キノ綱ニテ綱ヲ張り有之候先達テ渡來ノエケレス船モ同様ニ有之其綱ノ内手ニ帆布綿ヲ以テ拵候水夫共ノ釣り寢所ヲ綱ニテ卷立數多積立ニ豎

ニ並へ高サ六七尺程モ有之候様ニ見請申候右ノ如クイタシ候時ハ外ヨリ船ノ内見通難相成且ハ矢請ニハ相成可申船中ヨリハ右ノ透間ヨリ遠目鏡或ハ鉄砲等ノ筒先ヲ出シ自由ニ業ヲ成申候尤右ノ通ニイタシ有之儀ハ十六日相成及見異國船エ引揚ト直ニ船主部屋エ差置船ノ内ニ爲見不申故耽トハ見留不申扱又阿蘭陀商船ニテモ水夫共釣リ寢所ノ儀常ニ船底ニ差置候時ハ自然ト濕氣籠リ惡キ病ヒヲ請候故晴天ニハ船ノ上段ニ置風ヲ通シ陽氣ヲ請候儀ニ御座候

船縁ニ網ヲ張候圖



右ノ通申出候ニ付以書付奉申上候以上

十月

通詞

八月十六日七ツ時頃水野榮積トシテ異國船エ私共乗付候節水本船エ積請取不申以前毒試イタシ候由被爲成御聞候ニ付右ノ始末申上候様御沙汰ノ趣奉承知候然處右水船三艘ノ内最前ノ一艘ニハ水桶ニ入有之殘二艘ニハ水桶無之直ニ船ニ積込有之候處船底本船ヨリ異國人共何カ申聞候處水船エ罷在候得共船底ヲ試候様事ニ有之言語相分り不申候得共船底ニ相成自然潮杯差入候心付ニテ右ノ通り仕候儀ニハ無之哉尤毒試イタシ候儀ニ御

座候ハ、初ノ一艘積請候節可仕處ニ艘ノ船底ニ至相試候儀ハ全ク前件申上候通ノ儀可御座奉存候將又水積請方ノ儀ハ水船エ異國人兩三人卸リ立積請申候處持越候小田子數少々被方ヨリモ小田子出シ積取申候儀ニ御座候外及見候儀無御座候依之乍恐以書付申上候以上

辰十月

出役通詞

(240) 文化五年英船長崎亂妨一件

次に掲げんとする史料は中野禮四郎氏が參考の爲めに寫し取り置かれしものを前掲の史料と共に拜借し茲に載する次第である。

編年史料 光格天皇紀文化五年八月十五日ノ三 祝聽草三ノ九

口 上 覺

○昨十六日申上候長崎表渡來之異國船其儘難差置船同夜中燒潰の積に付松平圖書頭には其場に出張仕長崎奉行所明き候に付、私儀甲冑支度罷越、奉行所相守候様、彼地差置の家來の者に圖書頭被相達候趣申越、今子の刻承知仕候、依之急速支度、領内時津へ渡船罷越候積にて、今曉寅刻出船仕候此段御届申上候以上

八月十七日

大村 上總介

口 上 覺

○最前御届申上候通、今度長崎表へ異國船渡來に付て、私之領内時津渡海、長崎へ罷越候積にて、昨十七日曉寅之刻出船仕候處風波強く相成候得共押て相渡、同日午刻時津へ着船之處、異國船燒潰之儀は被相止候段承知仕候に付て者、着服相改即刻同所發足、未刻過長崎藏屋舗へ到着、追々御役所へ罷出、松平圖書頭對談仕

候處右船致出船、外に相替儀無御座旨被申聞候、此段御届申上候以上

八月十八日

大村 上總介

右九月七日御用番土井大炊頭殿へ御届

○去ル十五日午刻紅毛船長崎沖へ相見候に付爲旗合紅毛人召連檢使之者差出小瀬戸沖にて旗合候處萬端紅毛人の致方にて旗も紅毛人の旗を出し誦辯も紅毛口に候故彌紅毛人之本船に乘移るべく致候處端船をおろし此方の船に乗付紅毛兩人右船に連行候跡に付參間敷致候得共十四五人劔を拔をどし候に付檢使之者も引續可乘移致候得共大船故中に容易に難乗移殊に少人數にて可致様無之其儘引返し候由依之彼船へ連行候紅毛人、方便を以取返候様申付、檢使之者差遣候得共未有無不相分併一艘之事候得は先人數差出候には不及、萬一跡船も有之樣子に候は、其節可及沙汰旨、且端橋航にて湊内乘廻し候由、若上陸等致候は、召捕可差出旨、彼地差置の家來之者へ、松平圖書頭申聞候旨在所より申越候此段申上候以上

八月晦日

松平 主殿頭

右青山下野守殿へ御届

九月四日黒田家使者演舌覺

○於長崎先月十五日、異國船一艘渡來候に付松平圖書頭様に、彼地差置候家來の者罷出様子相伺候處、圖書頭様御對面有之、右船例之阿蘭陀船入津之振合にて、地方へ乗付候に付、爲旗合被差向候何蘭陀人より問を懸候處、阿蘭陀語にて相答、彼船々端船を差出し、阿蘭陀人二人を召捕、本船へ連行候に付、其儘に難差置、

當番方々番船付置自然出帆之跡に候は、繫留候様、且是非番方請持の御石火矢台場へ手當可仕旨申述候段、黒田甲斐守致承知候、依之手當之人數、官兵衛家老黒田源右衛門儀も、早速差越儀に御座候、右に付官兵衛名代甲斐守申達候段申越候、此段以使者申述候

九月四日

松平官兵衛使者

八月十八日長崎町人之書狀

○八月十五日朝六時、佐嘉領遠見々注進有之、異國船一艘追々進寄候趣之注進御座候、沖合西風にて、横帆故逆も入津有之間敷と評判致居候處、申ノ下刻高鉾<sup>\*蘭人はPaganと云ふ</sup>（近邊迄近寄候に付、居合之紅毛人貳人、筆者ホウシユマン其外役船、例之通高鉾沖まで漕出申候所、異國船よりはし船壹艘おろし、二十人程乗組、出島紅毛人乗船へ漕梶つかを取、無理に異船もとに引寄申候處、異人とも不殘劍を拔、神崎内に漕入候、右之次第追々御奉行所へ注進および申候、然る處御奉行所並役方市中共紅毛船入津と皆々相待居候處、右之注進故仰天大方ならず候、扨右異國船はし船三艘にて多人數之乗船也、出島鼻より大波戸前堺迄之船繋中を乗通五島濱付々大黒町北御米藏下に漕寄、夫より稻佐之處迄漕付、三艘共一同に相成、又稻佐之濱付前を乗通元船へ漕返り申候由、又々注進有之候に付及騒動御役所より檢使並地方團屋へ御差圖濱々御堅め有之惣町辻番所名方之勤番に御座候、町方火消のもの船揚場へ相詰、稻佐には彼方より追々渡海有之候得共、最早元々引取之跡也、夫より船藏の處御米藏大波戸、水島水門梅崎等へ石火矢備有之火矢方々相詰是十六日明ヶ方之事也、藏屋敷方も早飛脚櫓の齒を引如し、夜明ヶて翌十六日、御屋敷々紅毛人取返しに檢使二頭異國の之船に至り候處、筆者の紅毛人ホウシマン壹人返申候、同人へ食用の物カヒタンへ注文いたし候儀有之候處、直に

羊拾貳頭、鷄拾羽異船へ相渡、又々船より役方へ薪水タハコ切れ難儀仕候に付、右の品類上候、且又御當國へ對し毛頭遺恨無之に付、薪水被下候らは、直に御當地出帆可仕由申候、依之翌十七日水五艘、薪煙草等被下候處、人質の紅毛人下筆者フンニキマン役船へ歸申候右十八日晝四時直に乘出、北風強船如飛相見申候、乗出し七ツ時地方より三十里斗りも出蔭様相見へ申候、跡々日夜共に再火にて防所備罷在候

一出島カヒタン此節大きに恐候事御座候十五日日暮沖之左右聞へしより、惣紅毛人出島門退西御役所へ駈込出島は空地に相成候由、長崎會所より出島へ相詰候

一當年兩番所佐嘉領之年也、オロシヤ御手當にて、番主之外□野衣之由米倉權兵衛殿軍學者也並石火矢多人數、深掘詰所へ勤番有之候處御奉行所より引拂被仰出、不殘防方引拂に相成候筑前大組頭吉田市郎大夫殿軍大將也、右船手詰之處同様引拂歸國被致候、右に付當備方兩所共少人數相成申候

一佐賀御人諫早殿二陣故昨十七日到着也、しかし沖出張はなし、本陣よりの御出馬を待と見へし

一大村十五日の夜より、此もと手操りの衆大浦へ相詰、翌十六日追々侍衆早馬にて駈付、其外飛脚十六日夜中大浦へ備る、十六日大村上總介殿家老針尾大衛殿時津迄着陣す、十七日當地へ御着、大守家老、物頭衆陣羽織騎馬也、徒士衆是又陣羽織にて、大鼓螺貝等之侍押し備有、

一當地御代官高木作右衛門殿は稻佐松ヶ崎一ヶ所身投ヶ鼻一ヶ所石火矢備防所也

一大渡戸之町年寄藥師寺文左エ門詰所、當地石火矢方也、圍い土俵仕かけにて、三貫目筒改め致五挺備候

一出島水戸壹貫目筒二挺備る

一北瀬壹貫目筒二挺備る

筑前佐賀大村共に、船燒討之積り用意に備有之よし、日數滯船致候は、肥後柳河其外九州の諸大名出陣の積りに御座候由右に付異説區々御座候得共略之

追 加

一異國船はオロシヤにて無之、賊船と相見へ申候石火矢左右に四十八挺、不殘仕懸有之候由、尤今迄之異國船は大筒也、ケ様仕かけ候船は稀也

一右之船紅毛人に遺恨有之由申たりと承り候乍去實説は不相知候、積物は一切無之、但武具多く積入候よし一諫早御人數當十八日引取、凡十二頭、一組に足輕二十人づゝ大筒之組也、鎗組は三組、一組之大將陣羽織にて、同勢大體三十人斗つゝ、尤其外一騎前之侍鎗組皆陣羽織にて一行立も有之諫早豐前殿、鍋島七郎左エ門殿

領主御家老は三千石也

繁々當地勤番也

八月十八日

右は長崎町人書牘之よし、多喜某より寫すと云

八月十六日長崎町人書牘但長崎藥店より大阪之文通大阪より江戸伊勢町大阪屋徳右エ門方へ來り候由

○當十五日之朝、紅毛船一艘注進有之、市中は不及申御奉行様にも大悅に御座候、折節向風にて入津延引いたし候哉と存居候處、七つ時分沖湊に迄參碇をおろし候、然る處旗合之例に候故諸役船並に紅毛人二人參候處、矢張紅毛船之旗上り候咬喘吧出し候由申候小船をおろし七八人乘にて此方之紅毛人の乗合之船に漕寄候處紅



毛人に無御座候故、此方紅毛人乗船いたしかたく御座候處、早速此方の船へ異敵乗移り、劍を拔持紅毛人二人召捕へ、彼敵船乗込候處、本船より小き繩を付有之由にて夫を引付候處矢よりもはやく本船へ引上、諸役人を初御使者皆々御うろたへ被成御歸り被成候、右之趣御奉行様へ申上候處以之外御怒にて、此方の紅毛人を被捕やうくと御歸被成候ては不相濟様にて夫々又々御使者兩人此節は一生懸命と御定沖之御番所へ御駆込、委細御物語之上御加勢を御頼御座候處纔に船六艘人數一艘へ六人づ、差出可申様にて御請御座候由、中々夫にては力を落被居候處其内紅毛人二人之内一人へ願書を爲持、此方の番船へ漕寄願書之趣は、此節渡來之儀はエケレスにて、但長二十九間 乗込三百五十人石火矢四十八挺に數船添久敷ベンカラ國に逗留いたし紅毛船を目當出帆致、四十九日程にて當地へ入津致候由、何も日本國へ敵對致候儀毛頭無之只紅毛船に意趣有之處若哉紅毛船入津致居候得は燒討に致候積りにて渡海致候由人質之紅毛人を色々質問候ても、當年は紅毛船一艘も入津無之由當地繪圖杯も爲見候様々、案内委敷存知居候故中々僞申候ても直に相知候由纔端船三艘に人數二百人、大筒種ヶ島鳥銃燒討武具取乘、湊内漕廻り候得共、此方一人も手差候もの無之故、又々本船へ歸り申候、其當地兼子の御手配之通、彼場其外五ヶ所宿老惣年寄、本商人夫々等召連大騒動然る處右願之内食用不足致候由にて、牛二正野ぎ七疋いも百斤野菜品柿など、其外水薪願之通不相成時は、又々一人之紅毛人差殺申候此地へ押寄出島迄燒討にいたし候、其亂妨狼藉を働き杯と我儘申立、御奉行様殊之外御立腹にて先願之通品々十六日に相渡、右様に我儘申上候ゆへ燒討之積りに候へ共、松浦様大村様黒田様加勢手配り相調之御請出來不申、すでに御奉行様地下人役人許にて、燒討御用意之處暫く御猶豫之内、松浦御留守居御留候由にて御見合被遊候處右送り物之船歸り候處、エケレス人共悦、國恩難有旨、其外二人の紅毛人には酒など

勸め、出島カヒタンへ銘酒二ふらすいっぴふ（武藤曰く Frisco Koo を指す）一つ禮物送り早速明朝出帆可致旨御請也、併此方之用意手配さへ出來候へば燒討に候得とも、何分御年番松浦様殊之外不都合にて、一向役に相立不申候やみゝと十七日朝出帆仕候無程帆かけも見へ不申相成候以上

八月二十六日

猶々御奉行様並御使役人様方御大病にて迎も御養生不相叶よしとの事に御座候

九月二十一日名村多吉郎書牘

一筆啓上仕候、追而冷氣有之然者八月十五日エゲレス船一艘長崎表へ乗渡候始末荒方左に申上候

一八月十五日辰刻頃白帆相見候趣、肥前鍋島七右衛門殿より御注進有之、同國野母遠見々白帆一艘見出候御注進、午ノ刻頃に瀬戸より十七八里に相見候御注進有之候段、御奉行所より御達有之、其節旗合檢使として菅谷保次郎殿上川傳右エ門殿、阿蘭陀人通詞附添沖へ罷越候處、申ノ下刻頃白帆之船は、追々伊王島近く走り寄候に付四郎ヶ島邊迄檢使並阿蘭陀人何れも相越候處、赤白青横に縞之旗印、明かに相見猶又檢使より被相尋候に付阿蘭陀人が相尋候處、阿蘭陀旗に相違無之相見候段阿蘭陀人申之其後追々近寄殊に至て順風にて白帆之船へ難乗付程之儀に有之候處、彼船より俄に端舟を漕出し阿蘭陀人乗り候船へ漕付、彼端舟より罷越候者共へ阿蘭陀人より相尋候は、何國之船に候哉と相尋ね候處、阿蘭陀船にて咬啗吧出帆之由、阿蘭陀語にて相答候故、去年歸帆之役人は、きは渡來候哉と相尋候處乗渡の段申立候に付、無程御檢使一同本船へ可罷越趣、阿蘭陀人より相答候之處、端舟之者共隠し置候劍を振り上げ、不殘立懸阿蘭陀乗組之船へ飛込、理不盡に阿蘭陀人を彼端舟へ捕へ行漕出し候と相見へ候處、本船より端舟へ繩を付有之候を、本船より挽付候、

其夜異國船より端舟三艘に一艘は五十人つゝ乗組、石火矢鐵砲其外武器等相備へ、湊内へ漕入所々漕廻り候上本船へ漕戻し、翌十六日亦々端舟一艘湊内大多尾と申邊へ漕入候に付右捕へ候ため小船にて漕出候處追かけ候様子見受沖手の方へ引戻し候、其後之模様は別紙御覽に入候

一阿蘭陀人共御奉行所へ立退、海邊其外所々御備有之、市中之騒動中々言語に難述委細之儀は梅榮老より御承知可被成奉存候間文略仕候

梅榮は足達氏多喜某之門人にて、江戸の醫師なり、松平圖書頭殿の家來となりて長崎に至る當、十月江戸へ歸る

一(以下略高繩御屋敷へ云々とあり異國船一件帳面六冊梅老に渡すとあり)

九月二十一日

名村多吉郎

會昌啓様

猶々異國船渡來、直に私儀御役所へ被召出、御奉行様御直に被仰付候は被召捕候兩人取返し候か、左も無之候は、彼方々異國人兩人連歸り候様、只今々沖へ罷越得と利害異國人共へ申聞候様被仰渡候に付直に乘出し、翌十六日晝七ツ頃沖より引取申候、出船仕候砌は誠に討死を覺悟仕罷在候處、先無難にて相勤申候御休意可被下候以上

一ノ印

二ノ印 (横文字和解、文化英船ニ付  
蘭人口書と同一ニ付省略す)

三ノ印

エケレス船へ、筆者阿蘭陀人共被引揚候節之儀申上候横文字和解

筆者阿蘭陀人兩人、本船へ引揚候上にてエゲレス船主鐵砲を持、筆者阿蘭陀人の胸に押當阿蘭陀船二艘渡來之様子相尋候に付、入津無之段相答候處端舟三艘に鐵砲石火矢等相備へ一艘に五十人つゝ乗組、阿蘭陀船湊内に繫候船之有無相糺候爲漕入、亦々本船へ漕戻し候、且又カビタン者何ゆへ参り不申哉と相尋候に付、病氣之段相答へ候將又本船乗組人數者三百五十人と承り申候

右者筆者阿蘭陀人エゲレス船に引揚り候節彼方より如何様取扱候哉之儀八月十六日ほうせまん上陸仕候上相尋候處右之趣申立候に付、其節通詞衆へ物語仕候次第書付を以奉申上候

かひたん

へんてれきとうふ

右之趣かひたん横文字書付を以申上候に付和解仕差上申候以上

辰 九 月

茂 傳之進

石 橋 助右エ門

中 山 作 三 郎

名 村 多 吉 郎

○當月十五日夕方渡來之異國船昨十七日歸帆被仰付候に付御領内浦々被入御念候様御達書被相渡候故、則飛船取仕立方之及手當候處又々御呼出にて右船申ノ方へ飛行七ッ過には帆影も不相見候段、遠見方より申出、跡

船等も無御座候に付猶又此末御國々より、人數組等被差出候御手配に不被及候間其段御國々へ可申越旨、拾四ヶ所聞役一統へ被仰聞候、右に付ては湊内並市中諸所御堅めも御引取に相成候に付、御藏屋敷之取締も、昨夜より引取申候、右之段今日茂木より飛船を以御用人方へ相付申上候

一右異國船何國之ものと申儀は慥に相知不申候實はエゲレス大國之賊船と申事に御座候得共、エゲレス之儀は、日本渡海御禁止之國に候へは、表向之取沙汰無之、異國船にて相濟申候右船乗組人數三百五十人と申事に御座候船中には積荷等も無之、空船にて石火矢數多乗せ居候由

一十五日奪取候阿蘭陀人兩人差返候様追々檢使被差出、通詞を以被仰聞候得共、容易不差返船中食物等かひたんより相渡候は、引替可差返など、申事にて甚自儘之中分等も有之趣に御座候處、かひたんより牛貳疋ぶたなど差送り、其外御役所御下知にて米水等被下候處十六日夕方迄兩度に壹人つゝ差返し、無事に相濟候

一右船阿蘭陀旗印等迄も差出湊口へ碇を卸し候處にては、出向之役々にも紅毛船と相心得諸船異國船へ近寄候所にて、俄に端船に拾四五人乗組紅毛人乗居の船へ無體に乘込、劍抔拔候て兩人をおどし奪取、猶又湊内へ橋船乗入候仕形、不法に相聞候に付ては、奪取候紅毛人差返候上は、燒討にも可被仰付御含にて、十六日晝頃より俄に其御手常有之、長州大筒役藥師寺久左エ門大波戸に出張、幕張にて御預り之石火矢、其外大筒等船々へ乗せ付る手當、又者船中乗せ付之竹束御出來方に付、長崎中之木屋圍置候竹貫上、火工並輪替不殘大波戸に出張數多之竹束取捨、湊内に繋居候諸國の商船、並唐船抔を稻佐並大浦邊へ相鬪し湊内にて鐵炮等相放候ても不差支様被仰付、唐人屋敷阿蘭陀屋舖、其外湊内海手又は市中之堅め、町年寄之内

へ懸り被仰付、七十七町三二名町わりにて、付添町々火消之手之者を以相堅め候に付、地役人中は折柄に付都て御借刀と申名目にて、俄に帶刀御免、晝夜大勢市中を徘徊いたし、晝は大旗、夜は高提灯、役人之向は火事羽織着用致し候、右之次第に付、誠長崎中は上を下たと大騒動、尤諸家御屋敷も右に準し夜廻等有之、夜は御門に大丸挑灯を燈し候、尤十五日夜遅方々圖書頭殿にも海手、並市中御見廻り有之、嚴重之内にも大混雜にて御座候

一右之通燒打之御含ゆへ、最初は大村様には、湊内御領地之御堅め御手當被成置候様、唐津様には長崎御見廻りに不被及段、被相達置候得共其節俄に大村様には長州へ被差越、松平肥前守様御人數へ御加勢被成度唐津様には人數組被差出候様被相違候由

一右に付ては、村上總介様には、昨十七日七つ過長崎御着、直に御奉行所へ御出御座候得共、最早異國船出帆跡故御屋舖へ御引取、乍去先手之物頭組は、大波戸に出張幕帳にて備居候頭役の向は、總て陣羽織野袴具足箱一つ宛、足輕並供廻りは半天目印羽織上總介様にも御上下にて、御供廻りは陣羽織野袴にて御座候、御家老は馬上にて陣羽織野袴、手廻り二十人餘と相見へ申候、大村様御奉行所へ御出之節は、私共も大波戸に出張居候て、御役所へ罷出候に付能見届申候

一十六日夜は北風烈敷御座候に付燒討十分之御都合と申事にて俄に其御手配當にて御乗船之小早船も大波戸へ打廻り幕張相調御手廻りの人數は勿論市中御供之人數も追々打揃候様相聞候得共、聞役中へは何たる御沙汰も無御座候處、夜半過に相成候て右取沙汰も相止、少し穩に相成無事に相濟候に付十七日早天開合候處、右燒討之儀に付ては御奉行御一手にて相調候義にては曾て無御座候に付、佐賀衆へ俄に燒打之義被相

達候處詰合之役に御役所へ罷出、御番所詰人數又々少佐賀表より人數組差出候筈にて御座候得共今夜唯今迄壹人も到着不致候得は番人數而已にて、萬一仕損等御座候ても面目にも相懸り候儀故、佐賀表より總人數出張候迄、燒討御見合被下候様、無余儀願出有之候故御延引に相成候事にて御座候

一右異國船へは、佐賀より追々數多の番船被付置、檢使並役々通詞等迄も出張居候處、十七日朝異國人頭役之者、檢使乗船へ差越、阿蘭陀人二人奪取の次第は、阿蘭陀國は久敷敵國にて御座候に付此節日本へ通商の船を相拒度譯有之、咬啗吧(Jacuta)表へ差越候處疾致出帆候に付跡を追ひ候處、一切洋中にて不見當、最早長崎へ爲致入津候儀に候哉と存、日本へ乗渡り、阿蘭陀人二人相捕致吟味候處、當年は未入津不致旨申聞候得共、洋中にて船は不見懸候へば、定て湊内へ乗入居候を相隠し候哉と相心得、端舟を以湊内を見廻り候儀に御座候、右に付ては御當所の御法度は不奉存候て端舟湊内へ乗入候儀は誤入候、最早阿蘭陀人も差返し船中食物等も御渡被下候に付出帆仕度以後は日本へ乗渡申間敷横文字差出候由、右次第に付燒討も御取止めに相成、歸帆致仰渡候得共、實は歸帆申渡之檢使不差越内、異國船は湊口より帆を上げ致出帆候誠に小船之出入よりも容易驚入候、出帆にて御座候

一十五日爲族合檢使通詞差添阿蘭陀人二人出張候處蘭人乗船へ異國人差越奪取候に付ては、劍など抜おとし候よし、夫故通詞は海中へ飛入り、檢使は脇船へ乗移り候と申事にて、散々の評判に候、檢使罷歸り右之趣御奉行へ申出候得は、殊之外之立腹にて、則差越候て奪取候阿蘭陀人連歸り候様、稠數被申聞又々差越候由

一佐賀御番手人數にて、燒討不相調候に付、佐賀表より人數組到着迄御延引被願出候は兼て之御手當向に不

似合、當時おろしや一件も有之候處、御番所少人數と被申出候儀如何之儀に候哉、當年は最早紅毛船も入津有之間敷と内々にて人數等も過半引取有之事には有之間敷哉筑前などもおろしや一件に付、小早間船荷方迄も多艘參居候處、阿蘭陀入津は無之と申所々々引取て、相成候跡之よし、殊更右異國人端舟三艘程淡内へ乗入、大黒町下又は稻佐へも乗込候處、往來共御番所より操番の船も不差出されず、何と申事哉と色々評判いたし候

一長崎中は右の混雜にて、只今も異國人致上陸之儀と申觸候に付旅人は我先と逃行、田舎よりの奉公人も追々逃歸、此一兩日は市中肴類も賣行不申、能賣捌候は蠟燭並草鞋にて御座候

一佐賀衆筑前衆は、今日迄も到着無御座候最初異國船出帆に付ては、中途より引取候哉  
一大村様は一兩日御滞在と申事に承り申候

右之通爰元成行荒く爲御考申越、其外雜説とも無申計事に御座候御沙汰可被申上候以上

按に此書は武家之長崎詰聞役よりの書上なるべし

八月十六日無名氏書上

○昨十五日卯上刻、深堀遠見番所より白帆一艘見出し候旨、御奉行所へ注進有之、夫々所々遠見よりも同様申出候に付、阿蘭陀船入津之心得を以、例之通爲旗合、見届檢使御家人菅谷保次郎上川傳右衛門、通詞其外出役之もの共、紅毛人兩人召連午下刻波戸場出舟、小瀬戸迄罷越候處、彌阿蘭陀國之旗印に相違無之體に御座候に付、即刻同所出船、神ノ島於沖手本船へ乗付、既に乗移候とて、端舟に取付候處に、本船より七八人飛下り、孰も劍を拔持、阿蘭陀人兩人を難なく引伏せ奪取申候故、通詞猪股繁次郎植村作七郎兩人奪返し候



辻端舟へ飛入候折柄船離れ兩人共入水仕候由

但通詞兩人之事、表向は本文之通届出候得共内實は其體に恐れ水中へ辻込候との風聞も有之又は取返し候半辻、異國人に取付候處を水中へ放ち込れ候共風聞御座候て孰れを正説とも難相分候得共、水中へ落入候には相違無御座候

右騒動を見請、檢使兩人驚き恐れ、前後之差別なく、西泊り御番所に辻込申候故、地役人共、我先にと辻退皆々西泊りにて落合申候、扱水中へ落入候通詞共は、漸く船に取乗り、沖手どのくひと申肥前御領所へ、但長崎より三里許有之所也辻行、陸地より戸町御番所迄罷越申候由其時申異國船は高鉾島脇へ長崎より海上凡一里半碇を入船繋ぎ仕候但阿蘭陀人兩人を奪ひ取候後、直に阿蘭陀國之旗印を取除、エゲレス國旗印に引替申候得共、未何國の船と申儀相分り不申候、一説に魯西亞とも、又はエケレスとも風聞仕候

其旨追々御奉行所へ注進も有之、辻來候檢使其外地役人ともし御奉行所へ罷歸、其届申出候處、御奉行にも殊の外憤りにて、天下之御預り人被奪取、其儘に罷歸り候儀言語同斷之不埒に付急度御所存も有之候得共、先此涯の儀に付暫く差延置候間、即刻罷越是非く取返し來可申、左も無之候は、再び面會不相叶段被仰渡候處にて漸く本心に之付孰れも一命差はめ、又々以前の人數異國船へ差越候得共、何分備嚴重にて寄せ付不申候間、元のこたく戸町御番所へ罷越但戸町御番所より異船繋り居候處迄凡十八九町の海路通詞兩人物靜に小船より異國船近邊迄罷越被奪取候紅毛人を以是非く差返し候様可申入との手段に御座候由、御奉行所へ届來候旨取沙汰に御座候處只今十六日辰刻何之使も無御座、昨夜も明月にて御座候得共、夜分之儀にて沖之様子陸手よりは一向相分り不申候

一此間に異國人共三四艘之端舟にて、人數四五十人許乗込、忍やかに出立、湊内所々乗廻り既に岸涯近々と乗付、致見分候を見懸候、夫々と申内漕退き候體誠に進退之自由如飛に御座候

一陸手之備向者西御役所御奉行交代屋敷也前には市中火消共相詰、唐紅毛通詞二名帶刀御免にて孰れも請持之場所にて相固め、波戸場には土俵竹束を數百如山積立、町年寄共三十人宛人數を引連相備へ、市中海岸には二名

共相備へ稻佐は？御代官所一手にて被相固、陸手は隨分嚴重に相見へ候得共、沖手異國船の近邊へは、船一艘も無之、御番所より沖は備船漁船共相見へ不申候、此儀御奉行も至て念遣ひにて兎角申内出帆致候て

はと兩御番所へ催促有之候得共、少人數にて何分出張難相調由に御座候

但此少人數と申は、阿蘭陀船今以來朝無之最早時節後に相成候に付、野母遠見番所、並地役人出迎の向々等無益之失費に付引拂被申候故、兩御番所、御備人數も先月限引拂候様、被仰渡候故、誠に漸く武士拾人斗足輕二十人餘雜人共都合百人に不足の人數にて、船も七艘斗外、有合不申由にて、兎角佐賀表より、人數張出し不申候ては、相調かたき由に御座候

一御奉行所餘程取込に候哉一體下知の趣大分筋違の事勝ちに有之由、散々の不評判にて御座候、全く不慮の儀にて、混雜而已と相見へ候由之風聞に御座候

一異國船は至ての大船にて、一體之形容紅毛船とは違、軍船と相見へ申候、石火矢二段に構百挺斗とも、亦八十挺とも、五十挺とも、取沙汰御座候得共、誰有る近寄駭と見定候もの無御座、取々の風聞に御座候、積荷物等格別に無之様子に御座候

右の趣は私儀自身見及候儀而已にも無御座、口々より承得候義、荒々書取右様迄申上候に付自然少々間違

の儀も可有之、其段は御斷申上置候、右は今十六日辰之中刻迄の樣子に御座候、猶此未時々の模様可奉訴候以上

八月十六日辰下刻

名 缺

按に此書は或武家の長崎詰聞役よりの書上なるべし、次の風說書上も同人の書也

無名氏風說書上

○先便申上候異國船一件十六日巳ノ上刻異國船より申出候旨にて、戸町御番所迄出張罷在候檢使之者より、御奉行所へ届越候趣左の通に御座候

我々事此節廣東へ心さし致渡海候處、於洋中食物遣切り候間、其品々を得候ため此地へ罷越候得は其事を可申通手寄無之候に付、謀計を以紅毛國旗印を立、紅毛人兩人を召捕置候、依之食牛四疋野牛十二疋野菜等被差遣候はば、紅毛人引替相渡可申候、若其儀許容於無之は所存も可有之由

但所存も有之と申儀内實は湊内に有之候唐船日本船を始め市中迄も、火術を以焼打に可致由申出候得共、

此義は隱密にて不申觸様にとの御趣意に候段、通詞内話に御座候由

御奉行所よりの御返答

願之趣得貴意候尤可相願筋有之候は、宜敷禮儀を以可願出事に候處、外異之人とは乍申其辯も無之段は不届之至りに候併御國法不案内之儀に付ては、其罪を差免、願の通聞濟、早々爲取候間早々紅毛人可差返候との御返答に候由

右之通被申渡、早速品々取調異國船に被差送候處直に紅毛人差返し、猶申越候趣は、品々御差送之段忝禮謝

申越、猶又不足の品も有之候間左之通品々被差送候はば、今一人捕置候紅毛人も無事に差返し可申由

薪 水 葉煙草 梨子 唐芋

右は差返し候紅毛人へ申含遣し申候に付、於御奉行所一體之様子御尋有之候處、申口左之通に御座候由

私共事被召捕本船へ引上數十人取巻鐵砲劍を抜突付候て相尋候は、當夏咬啗吧より出帆之紅毛船二艘此地へ致渡來候、右は何方へ船繫置候哉速に有體を可申明候、萬一僞於隱置者、直に刺殺可申由、紅毛語を以責め尋申候に付、素入津も無之儀に付其旨相答申候處、早速端舟三艘にて一艘に五十人つゝ乗組、劍鐵砲を携へ湊内所々を見改め候體に御座候、程なく歸來り彌紅毛船繫ぎ居不申段届申たる様子にて、夫より以前之取扱とは引替り、料理等差出し丁寧に饗應申候、其後は害心の體相見へ不申候、爰に不審なる儀は右端舟罷歸候節日本の衣服大小紙入等を持歸り頭人へ差出申候

但是は深堀より佐賀御屋敷へ飛船被差立候節、小舟にて遠方之濱邊を漕來候を端舟より湊見改候に出候折柄にて、剥取候由之取沙汰にて御座候

船は至て嚴重にて三段に拵、何れも武方之者共斗と相見、皆々劍鐵砲を携居申候、石火矢は勿論、大筒小筒數百挺備立有之、乗組人數三百人餘と相噺候得共私見請候は三百五六十人斗と相考へ申候、頭人は歳十九歳之由にて御座候、乗組之内阿蘭陀人兩三人魯西亞人と覺敷もの四五人、諸國之集り者四五人つゝ、其餘は頭人を始め皆エグレス人と見請申候、積荷等少く、兵糧武具而已にて、全く軍船之體に御座候、右は海賊ともにも有之間敷哉に見請申候

右糺方相濟、直に歸り來候紅毛人を以、異國船へ御返答有之候は、願之趣は聞届候併紅毛人と諸品引替之義

は決して不相成候、紅毛人を差返し候は、随分願之品々可爲取之、若及遲滯候は、無是非も、御國法相立候様御所存も無之候ては難相成、左候ては不穩に候間、何分にも早々可相返との御返答被仰越候由、然る處御尤の御趣意に聞請候哉、寅ノ下刻頃兩人の紅毛人無事に差返し來申候、右往答中密に燒打之用意有之、假令紅毛人一人は歸り來不申候迎、日本之御武威には難被替由にて、佐賀大村へも再往再三人數組御催促有之候へども、何分遠方之儀早速之出張難調由にて、御奉行は甚御無念に被存候由併右出勢無之とて、其儘可致差置様無之由にて、先兎角市中騒立不申様精々被申觸自身少人數にて船付之場所へ被見廻、其以後者御奉行始家中、並年寄其外地役人迄も、備向へ罷出候者とも、何れも甲冑にて御奉行所へ相詰罷在、自然明日中佐賀御出勢無之候は、御奉行所手勢並地役人共引率にて、被押寄候支度相揃ひすでに御奉行乗り船も波戶場へ相廻させ有之候

一諸家様御付人も十五日波戶場へ相詰居御用事候は、承度旨相届候得共、纔一艘之儀に付諸家様より御人數組被差出候にも及び不申跡船も相見へ候は、其節は可被及御沙汰、先づ夫迄は差控可然由に御座候尤唐津様には御人數組被差出候御用意有之度旨、可申越由被申達候

一十七日卯上刻、願出之品々左之通通詞を以被差遣候、陸手は専ら燒打之用意最中にて、追々諸手當相調候處、異國船は何々怪敷事も無之端舟より近邊之濱手杯遊覽致、本船は音曲にて相樂み居候由、其所へ願出候品々持届候處無程頭人罷出、前後左右多人數相待、端舟迄罷出厚禮謝申述候て、其體誠に悠然と相見へ候由、無程諸品本船へ積請候由、端舟も歸來、此方々の船にも引退、一町斗も相隔候處俄帆を引上げ、折節風順宜く、速に硫黃島を通り抜、大洋に走り出申候此時巳ノ中刻比同日夕方諸所遠見より見隠れの注進有之誠に

十分被欺、諸人無念之拳を握り候へども、可致様なく惻れ果候斗りに御座候

薪二艘

水五艘

から芋二百斤

葉煙草五斤

梨子數三十

一御奉行所にも折角諸手分け用意等も相調被置候處畢竟異國船繋ぎ留め之手當、佐賀御人少にて不相調儀を以右之通手もなく被取逆候事、誠に御無念無申斗様子に相見へ申候由、無程諸家様御付人被相招異國船出船致し候旨被申達、佐賀御付人斗被引留置、被申出候趣は、今日異國船安々と取逆し候付ては、今更申出候も無詮事に候得共、沖御備向御引拂可然旨相達候儀は、ヲロシヤ船渡來の用意御備にて有之候、然るに兩御番所定例之御備向迄被引拂、剩諸所臺場にも一人之備もなく虚しく幕旗而已を被立置候儀何共不得其意事に御座候異國船は不及申唐紅毛人之見請被手前難相濟、至て不面目之事に候段被申候之由

一午上刻頃大村様御出陣御座候得共、最早出帆跡之義に付、一往渡戸場にて御陣揃有之、一時斗御備被立置無程御歸城にて御座候、夫より地役之出張も追々被引取拂候

一御奉行所には、早速江戸御届之宿次被差立諸首尾相濟檢使兩人を被呼出其方共儀此節紅毛人取返し來候儀は誠に勇々敷事に相見へ候、一旦被奪取候事は不意之儀にて、越度とも難被申右様嚴重之備有之異國船へ、少人數にて再往差回ひ、無難に紅毛人取返し來候儀、具に及言上候間必心得違等致間敷候段被申渡候由、其後は少し物靜に相成候に付、舊臣一兩人呼寄せ、今宵は餘り月も晴やかに候間密に月見の酒宴可相催とて暫物語なと有之、最早及深更候故可致休息旨被申付、引取候末四半時頃、御奉行松平圖書頭殿被遂切腹候由至て悠々敷御生害にて被有候由之内沙汰に御座候歲四十一歳之由に御座候

一右御切腹有之處、以前之不評判と引替至て評判宜惜ぬものは無御座候其代り佐賀至て之不評判にて御座候第

一兩御番所御無人、次に深堀飛脚之義にて、散々惡説有之候

右は爰元風聞にて耽と不取留儀も御座候得共右様迄申上候間、其段御含可被下候以上

按に此書は武家之長崎詰間役の書上なるべし。